

コミュニケーションの難しさ

● 山 崎 一 穎

私は平成19年4月から跡見学園中学校高等学校の校長を命ぜられ、大学1日、中高4日の勤務をこなしている。校長として月に2回ないし3回は、中学生のみ、高校生のみ、あるいは中学高校の合同朝礼で校長講話として15分ほど話している。

従来校長訓話としてあった名称を校長講話に変えた。私の中学校、高等学校の校長が何を話したのか一切記憶にない。それは多分訓戒の話しであったからであろう。私が訓話を講話に変えた理由は、出来るだけ中学生高校生に知的好奇心を喚起したいと考えたからである。また、朝から校長に説教されては、1日が元気で過せないだろうと考えたからでもある。

校長が生徒たちに話した事はすぐ文章化し、「学校だより」とし

て保護者へ配布をしている。校長の話しが家庭で話題になれば、コミュニケーションの輪が広がるだろうと思っている。

今日まで15分程の話しを立ったままで、私語することなくよく聞いている。ある保護者が、私に娘は校長先生の話しは長いが、面白いと言っているとの感想を聞かせて下さった。とにかく中学生は難しい。ある日の中学生高校生合同朝礼（約1600人）の校長講話を再現し、その後日談を記す。

◎「体験」から「経験」へ

辞書で「体験」と引くと、「実際に自分で経験すること。また、その経験」とあり、「経験」と引くと、「直接触れたり、見たり、実際にやってみたりすること。また、そのようにしてえた知識や技

術」とあります。いくら読んでもその差異が私にはわかりません。

哲学辞典では「体験」の説明の項に、ややヒントになることが書かれてありました。「知性的な一般化を経ていない点で、経験よりも人格的個性的な意味を持つ」と書かれています。

そこで私は「体験」とは個人的な色彩が強いものであり、多くの人の個人的体験が、一般化し、普遍化するまで広がり高められて初めて経験になるのではないかと考えました。個人的体験をみんなの体験（経験）にまで高めるためにどうしたらよいのでしょうか。そのために〈読書〉が必要であると言いたいのです。一人の人の体験は限られています、書物の中で味わう体験は無限です。

今日の話は中学生のみなさんには難しかったかもしれません。そうであるならば、こう考えてみてください。

問い なぜ読書をしなければならぬのか。

答え 一人の人生において体験することは限られていま

す。しかし読書で得る人生の体験は多いはずで、一人の体験に読書で得た多くの体験を積み重ねることで、小さな体験は大きな体験（これを経験と言います）になります。そのために読書が必要です。

高校生のみなさんは体験を経験まで広げ、高めるために読書が必要であると考えて下さい。書物の中の人生の豊かさが、個人の体験を普遍化、一般化まで拡大し、深めてくれるはずで

中学生・高校生のみなさんに強調したいのは、読書は食事と同じだということです。食事を取らないと栄養障害を起こすように、読書をしないと心が身体から離れていって心がやせ細ってしまいます。それ故に趣味と聞かれて「読書」と答えてはいけません。趣味とは精神（心）の遊びです。それは読書以外に探しましょう。

後日中学2年生の担任からクラスの生徒が、校長先生に質問があ

るので時間を取ってほしいとの連絡を受けた。その日の放課後2人の中学生が校長室を訪れた。中学生の質問は私が講話で読書を趣味だと考えないでほしいと言った点に関わっている。

自分は本が好きで沢山今まで読んで来た。趣味はと聞かれて「読書」と答えて来たが、それを校長先生はいけないと言う理由がわからないので説明してほしいとの事であった。私はまず相手の言い分を肯定した。すなわち、今は読書があなたにとって趣味でいいですと言った上で、三度の食事を取らないと身体が痩せ細る様に、読書をしないと心が痩せ細り、貧しくなることを説明した。そして、食事も読書も私たちが生きるためにどうしても必要なものだから趣味と違うと語った。

説明を聞いていた生徒が、それでは趣味とは何かと問いかけて来た。私は即座に精神の遊びである

と答えた。生徒は精神の遊びでは分らないと言う。私は少し考えて、その事でお金を儲けないことと答えたら、私は読書をしてもお金を儲けないのだから趣味でいいのではないかと言う。こちらは追詰められ一本取られた形となった。事程左様にコミュニケーションは難しい。

校長講話の最後に今日も頑張ろう！とエールを送って降壇することになっている。すっかり頑張ろう校長の渾名を付けられている。廊下ですれ違う時、生徒は私に頑張ろうの言葉を発する。期末試験の最終日、2階の昇降口から下にいた私に向かって、2、3人の生徒が手を上げて校長先生頑張ったと言う。私も両手を上げて良くやったと答えたら、生徒たちは、でもだめだったと返事を返えして来た。一瞬私は言葉を失った。まだまだ修業が足りない実感するこの頃である。